

聞名仏教

第 146 号 毎月発行
(発行日) 2022 年 11 月 1 日
発行所: 真宗大谷派念佛寺
〒 663-8113 西宮市甲子園
口 2 丁目 7-20
JR 甲子園口駅下車歩 4 分
電話 (0798・63・4488)
(発行人) 土井紀明
<http://nenbutsuji.info/>
アドレス nenbutuji6@gmail.com
郵便振替「東本願寺護持基金」
00930-7-146886

《 聞法会ご案内 》

- 〈同朋の会〉
毎月 22 日 午後 2 時始
(8 月は休みます)
- 〈念仏座談会〉 8 月は休み
毎月 12 日 午後 3 時始
- 〈「聞名の会」法話・座談〉
毎月 6 日 午後 7 時始
- 〈真宗入門講座〉 (副住職担当)
毎月 18 日 午後 6 時 30 分始

罪を消す道 佐々木蓮磨

今から三、四十年ほど前のことでありましたが、ある友と別府へ遊びに行きま

したところ、「之介画伯の作品展」という掲示を見かけました。友達と画が好きでありましたので、一緒にその画展を見たのですが、その第一印象は「なんとという気品の高い画であろうか」というにありました。

ところが、その画伯の画論について話があるというので、引きつづき、その話を聞きましましたところ、画の話が、修養の話か、また宗教の話か、区別することのできぬような話でありました。

彼の話を聞いてみると、画の上手下手というよりも、その線の善し悪しというところを第一にしているのです。そして線というものは心の現れであるから、いかに画

は上手に描かれていても、精神が抜けていると線に生氣がなく、欲がはなれないと線が正しくない。

中でも最も大切なことは、心の和である。心の和というものは、真善美を現す根元である。そこで人間は、常に心の和をとり戻す修行が何よりも大切である。聖徳太子が「和を以て貴となす」と言われたことは、実に人間生活の指針である。そこで私は、画道も、書道も、また歌道も茶道も、和の修行以外にはないと信じている、と言われるのです。

私は画伯の話に非常に共鳴いたしましたので、講話の後、特に画伯に面会を求め、遂にその晩は同じ宿に一泊して話し合いました。画伯の話によると、かつては頭山満翁などの志士と交際して国粹派であったそうですが、感ずるところが

あつて志士と交わりを断ち、専ら画道に精進し、竹田翁の画風を究め、遂にその精神に触れた、と言っておりました。

彼の話を聞くと和の道はまず我が心の和が一番である。心の和ができないかぎりいかに和を説いても駄目である。心の和は自己の罪を知って、その非を改め、自己の罪を知って、その罪を消すことによつてうまれるものである。従つて、いかなる方法を講じても、自己の非に気づかずまた罪を消さなかつたならば、決して和はうまれない、と言われるのです。

そこで私は「罪を消すには、どうすればよろしいか」と尋ねたところ、画伯の言われるには「罪というものは、ただ自分が知っただけでは駄目である。自分が知ったならば、人の前で思い

切つて、サンゲ告白することである。それは、なるべく多くの人の前で、率直に述べるのが大切である。少しでも弁解がましいことを言つたならば、罪は消えない。ましてや罪を弁護することは罪のウワバリであると言われるのです。この画伯の画論を聞くことによつて、なんだか明るい世界が開かれたような感じがしまして、どこに達道の人があるか分らぬということを、痛切に感ぜしめられました。(了)

【念佛寺発行書籍】

- (一) 『木村無相・お念仏の便り』
- (二) 『松並松五郎念仏語録』
- (三) 『真宗の念仏と信心』
- (四) 『真宗教学の諸問題』
- (五) 『近代教学と伝統宗学の接点』
- (六) 『佐々木蓮磨・法味寸言』

現代真宗問答 11

り、という二つの逆の意義がある(二三頁)

であり、それによつて仏になるのだ、という理解です。そうするとここでは、衆生という母胎に如来を胎児のように内蔵しているといわれるのです。これが仏因です。この仏因が仏道修行によつて結果、仏になるといわれています。このことは「一切衆生悉有仏性」ともいわれ、一切衆生には仏になる性質(仏性・仏因)が具わっているという教説です。これを能撰蔵ともいわれています

〈さらに進んでいえば、表現の相違は観点の相違に帰着する。如来法身の立場に立てば、衆生はそのまま法身のうちに含められる。これは宗教的にみて極めて意義の深い表現であるが、この観点からタターガタガルバという言葉が解すれば、タターガタなるガルバとして、衆生は法身の胎児とみることができると〉(高崎直道著作集第七巻三五頁。春秋社)

B 「私たちは仏の子です」とよくお聞きしますが、これはどういう意味ですか」

れてきましたが、それぞれ内容の深い思想です。この中の如来蔵思想が今回の「仏の子」の教えの基になると思えます」

と中村元博士は説明しておられます。そしてこの中「仏の子」とは「如来の胎児」という如来蔵思想の基本の内容に連なる言葉です」

「一切衆生悉有仏性」ともいわれ、一切衆生には仏になる性質(仏性・仏因)が具わっているという教説です。これを能撰蔵ともいわれています

A 「これは単なるキャッチフレーズの言葉として一般に流布していますが、仏教の深い教えとして受け取ることができません」

B 「如来蔵思想とは」

A 「如来蔵という言葉は、サンスクリット語で、〈タターガタガルバ〉といいます。タターガタとは如来、仏という意味です。ガルバは母胎、胎児という意味です。

B 「(仏の子)であるということと仏(如来)の胎児というのは共通の意味があるのですね」

A 「ええ仏の子ですから」

B 「ではもう一つの〈如来の胎児〉の意味は」

A 「これは逆に衆生が如来の胎児であるという意味です。これは所撰蔵ともいわれる、〈如来の中に入れられる〉という意味で、衆生が如来に撰せられている、ということとです。今、〈私たちは仏の子〉というのはこの如来蔵の意味は重要です。高崎直道博士という如来蔵思想研究の第一人者がいますが、次のようにいっています。

B 「深い仏教の教えとして受け取る場合、それはどのような教えになりますか」

A 「仏教はインドで起こり、その後仏教思想は展開していききました。まずは上座部仏教の教えで、これは現在ではタイとかミャンマーとかスリランカなどの南方系の仏教の教えになっています。その後大乘仏教が起こり、この教えは中観(空)の仏教、そして唯識の仏教、さらに如来蔵思想として展開しました。それから密教と、このように大乘仏教はインドから中国さらに朝鮮半島を経て日本へと伝えら

B 「では(如来の胎児)とは」

A 「如来蔵思想の(如来の胎児)の意味は、二つの理解がなされてきましたが、一つ目は聖道門の仏教でいわれる場合です。これは「われわれの中に如来がある」という意味ですが、この場合は、如来は胎児として衆生の母体の中にいるという意味です。どのような衆生の心にも仏になる可能性としての仏因(胎児)があるということとです。その仏因を开花させるのが仏道修行

B 「ではもう一つの〈如来の胎児〉の意味は」

A 「これは逆に衆生が如来の胎児であるという意味です。これは所撰蔵ともいわれる、〈如来の中に入れられる〉という意味で、衆生が如来に撰せられている、ということとです。今、〈私たちは仏の子〉というのはこの如来蔵の意味は重要です。高崎直道博士という如来蔵思想研究の第一人者がいますが、次のようにいっています。

A 「如来蔵思想とは」

A 「如来蔵という言葉は、サンスクリット語で、〈タターガタガルバ〉といいます。タターガタとは如来、仏という意味です。ガルバは母胎、胎児という意味です。

「如来蔵思想とは」

A 「如来蔵という言葉は、サンスクリット語で、〈タターガタガルバ〉といいます。タターガタとは如来、仏という意味です。ガルバは母胎、胎児という意味です。

B 「では(如来の胎児)とは」

A 「如来蔵思想の(如来の胎児)の意味は、二つの理解がなされてきましたが、一つ目は聖道門の仏教でいわれる場合です。これは「われわれの中に如来がある」という意味ですが、この場合は、如来は胎児として衆生の母体の中にいるという意味です。どのような衆生の心にも仏になる可能性としての仏因(胎児)があるということとです。その仏因を开花させるのが仏道修行

B 「ではもう一つの〈如来の胎児〉の意味は」

A 「これは逆に衆生が如来の胎児であるという意味です。これは所撰蔵ともいわれる、〈如来の中に入れられる〉という意味で、衆生が如来に撰せられている、ということとです。今、〈私たちは仏の子〉というのはこの如来蔵の意味は重要です。高崎直道博士という如来蔵思想研究の第一人者がいますが、次のようにいっています。

る、という二つの逆の意義がある(二三頁)

で、胎とは母体と胎児のどちらをも意味する(二三四頁)

「如来蔵思想とは」

A 「如来蔵という言葉は、サンスクリット語で、〈タターガタガルバ〉といいます。タターガタとは如来、仏という意味です。ガルバは母胎、胎児という意味です。

B 「ではもう一つの〈如来の胎児〉の意味は」

A 「これは逆に衆生が如来の胎児であるという意味です。これは所撰蔵ともいわれる、〈如来の中に入れられる〉という意味で、衆生が如来に撰せられている、ということとです。今、〈私たちは仏の子〉というのはこの如来蔵の意味は重要です。高崎直道博士という如来蔵思想研究の第一人者がいますが、次のようにいっています。

ここで法身というのが如来であり、仏のことです」

B 「そうすると、衆生は如来の子(胎児)としての衆生なのですね」

A 「ええ、浄土教においては、〈如来の胎児〉とは如来の母胎の中にいる衆生という意味で受け取るのが、正しい受け取り方になります」

B 「法身が如来のことといわれるのは」

A 「アミダ仏は方便法身であり、その元に法性法身でましますと説かれてきました。ですからアミダ仏は法身と正しいいいわけです。

ですからここで「法身の胎児」ということはアミダ仏の胎児、すなわちアミダ仏の子だといわれるのです」

B 「そうすると、衆生がアミダ如来の胎児ということですね」

A 「ええ、そこでアミダ如来は寿命無量であることは今まで何度も申しました。私たちの寿命は有限(有量)です。有限な私たちのいのちは無量なアミダ仏の寿命の中に包まれているものであるということ、それを比喩的に言えば、寿命無量の如来のいのちの母胎の中に包まれている胎児のようなものが衆生だということになります」

B 「衆生の一人としての私からいうと、私は寿命無量の如来の中に包まれている胎児のようなものだ、ということですね」

A 「ええそうです。私は寿命無量のアミダのいのちの子といえるでしょう。これを喩えて、ザクロの実はザクロの果実の中に、一杯つまっているように、一

切衆生のいのちは寿命無量のザクロの果実の中に包まれているとたとえられます。そしてこのことを深掘りすることが大切です」

B 「深掘りするとは」

A 「実際に、妊娠している母親と胎児の関係を考えてみてください。胎児のいのちと母親のいのちは別なものではないですね。母親のいのちから生まれ、母親のいのちの中であり、母親のいのちと離れず、母親のいのちと一体といえるでしょう。はっきり言えば母親のいのちのほかに胎児のいのちはないということ。胎児が自分で作つたいのちではありません。母親の命の働きとして胎児のいのちがあります。胎児は母親のいのちと離れては生存できません。母親のいのちと一体です」

B 「現実の人間の母親と母親の中の胎児の関係はまさにそうなっていますね」

A 「現実の母親と胎児という関係は、無量寿の如来なる母と胎児としての衆生

(私)を考える上で相似なのだということ。よく似ていますから、人間の母親と胎児の関係で如来と私の関係が教えられます」

B 「ということは、私の命はアミダ仏の命と一体であり、離れなくて、アミダの命のほかに私の命はないということですね。」

A 「ええそうです。私とアミダ仏は不可分であつて、離すことはできません。常に一体です。ただし、私の側からいうと、私はアミダ仏の子ですが、私は私であつて私はアミダ仏ではありません。すなわち不可同です。胎児と母親は一体ですが、胎児は母親かというところではありません。胎児は胎児であつて母親ではないのです。不可同です」

B 「私は仏の子であるが、私は仏ではないということですね」

A 「ええそうです。しかし現実の私は「私はアミダ仏のいのちのほかにない、アミダ仏と離れない身である」ということを全く見失っています。私は私であつて、

それ以外のものではないと思つています。そこに迷いがあるのです。胎児は母親の母胎の中にあり、母親と一体でありながら、胎児はそれを知らないようなものです」

B 「無量寿の如来を離れて私は成立しないのに、私はアミダ仏とは関係なく、私は私以外の何物でもない、という孤立的な自我として私は生きていますね」

A 「ええそれが、根本的な迷いであつて、如来が私のいのちの主であり、如来のいのちの中のものであることを知らせてくださるのがナムアミダブツのお声なのです」

B 「ナムアミダブツのお声を聴くということは、アミダ仏が「ここにいて、汝を摂め取っている」との喚び声なのです」

A 「ええそうです。これはいつもいつていることです。なおここで胎児と母親の関係のたとえでもう一つ言っておきますが、胎児が産

して外に出ると初めて母親を見るとともに、もはや胎児ではなく、人の誕生であるように、娑婆から浄土に生まれるとアミダ仏を見、そしてもはや胎児ではなく、仏になるのです。そういう比喻でもあります」

B 「いままでのお話から教えられることですが、衆生がアミダ仏のいのちの子であるということは、私以外の他の人々もまた仏の子ですから、私と同様にアミダ仏のいのちをいただいている方たちなのですね」

A 「ええ、当然そういう見方ができますし、そういうように実感していくことは非常に大事なことです。大谷派のスローガンに「一つのいのちをみんな生きていく」というのがありますが、一つの命とはアミダ仏の寿命無量のいのちであり、このいのちの中に一切衆生のいのちが成立しているのです」

B 「アミダ仏のいのちが私たちの存在の根拠ということになりますと、全てのい

のちは平等にして尊い命だ
ということになりますね」

A 「ええ、そうなのです。
衆生のいのちはみな平等に
尊いという真実に完全に目
覚めたお方が仏陀です。で
すから仏陀のことを〈平等
覚〉ともいわれるのです。
佛道修行の上で大事なのは
一切のいのちあるものは平
等にして尊いということに
目覚めていく道であるとも
いえます」

B 「言われることは分かり
ますが、これを実感するこ
とは大変難しいでしょうね」

A 「そうなのです。私たち
は自分のいのちは尊いと思
つても〈他者のいのちを尊
い〉と思い、同じいのちに生
かされている〉ことを実感
していません。実感できな
いのは自他を分離をする自
我意識いけば煩惱によって
目が曇らされて、自我意識
を中心に生きているからで
す」

B 「私と他人とは別物であ
り、他者にたいして、自分
を利する人を友として愛し、
自分に不利益な人を憎むと

いう愛憎の煩惱でしか他者
を見ていませんね」

A 「ええそうです。仏の教
えを聞き、全ての人(衆生)
は仏の子であると聞いてい
る内に、こうした仏の言葉
に照らされて、先ずは自分
が人を差別し、嫉んだり、
軽ろんじたり、排除したり
するような罪があることを
知らされます。そこに罪を
懺悔するという懺悔行が、
仏教では大事な修行として
説かれています。東大寺の
二月堂のお水取りの修行の
目的は懺悔行をなすことだ
といわれるのもこのゆえで
す」

B 「真宗で懺悔はどのよう
に教えられますか」

A 「私たちには罪を懺悔す
る心すら起こらないお粗末
な凡夫であるとお聞きして
います。ですから懺悔行す
らできない凡夫は教えを聞
き、教えによって自分の罪
が少しでも知られたらお念
仏を申すことです。お念仏
を申すことが懺悔におのず
からなるのですよと宗祖は
おっしゃっています。これは

有難いですね」

A 「お念仏を申し、お念仏
を聞く、そこに〈罪深き汝
よ、念仏申すべし〉と仏の
仰せを聞かされますから、
〈罪の深いこんな私を受け
取ってください、ナムアミ
ダブツ〉とお念仏を申させ
ていただくほかはありません。
ん。そういう念仏生活の中
で、アマダ仏の大悲にふれ
ていくことを通してほのか
なりとも他者も仏の子なの
だと感じるお徳があらわれ
てくるということもあり得
ましょう」 (了)

【香樹院徳龍師の言葉】

江州長浜のさだ女、香樹院
講師に随い、聞いても聞いて
も疑い晴れず、加賀まで随い
行きしが、師いわく。

『雪も降り寒くもなるゆえも
う帰れ』

さだ女いわく。

『私もどうも信ぜられませぬ、
疑が晴れませぬ、聞こえませ
ぬがいかが致しましょう』

師いわく。

『そのまま称えるばかりで御
助け。其の外になにもいらぬ
ぞ』

【お便り】

Tさんより

阿弥陀佛という仏様は方
便法身であると聞いており
ます。形を必要としない仏
様が形を持つわれらのため
に取らざるを得なかったお
姿が声であり、言葉という
お姿であり、そこに大悲の
極まりを感じます。

時、場所、人を選ばず、
常に、〈われ汝と共に在り、
決定して、浄土に生まれさ
せる、若しできずば我、仏
に成らじ〉、という誓いの南
無阿弥陀佛を聞信するひと
つで、必ず浄土に往生を遂
げさせて頂くというのは、
全く信じられない誓願であ
ります。

一方で、不思議にもこの
誓願に対する疑いには、微
塵の用事ありません。

あろうがなかろうが、こ
のまま助けられるよりほか
に道がないからであります。

(了)

【住職雑感】

この秋、研修旅行

で一泊し、また法話に出かけて一泊した。
宿をネットで予約したら全国旅行支援の
補助があり、また泊まった地域ではク
ポン券一人三千円分が頂けて、旅費が実
質半額以下になった。これは有難いと思
ったが、政府はこれ以外にもマイナカ
ード取得などさまざまな補助金を次々に出
している。これらの資金は大蔵省でお札
を刷るだけで生まれてくるのであるう
か。しかしこの付けは将来どこかで国民
に被さってくるのではなからうか。経済
には疎いのでどういふ事態に将来なるの
か見当がつかないが、国債の赤字が膨大
になりとんでもないことになりはしない
か。今さえよければいいという考えに傾
きやすいのが人間業であるが因果応報の
道理を忘れてはなるまいと思う。

ニュースで、ある主婦が夫の殺人を五
十万円引き受けてくれる殺人請負人を
ネットで探し、それに応募した若い二
人が彼女の家に押し入って夫に重傷を負
わせたという事件があった。殺人者が来
る時刻までもネットで打ち合わせ、その
時に家の錠を開けておいたという。しか
も夫にどんな怨みがあったかというど、
夫に黙って一〇〇〇万円の借金をしてい
たのが夫にバレて激怒されたからとい
う。たった五十万で殺人を請負う者がい
ることもさることながら、それを依頼す
る者がいること、こういうことは自他に
おける人心の闇の深さを知らされる。